

<文化財の種類 有形文化財（考古資料）>

名 称	瓜生堂遺跡出土銅戈
員 数	銅戈 1点
所在地	和泉市池上町四丁目8番27号 (大阪府立弥生文化博物館)
所有者	大阪府
年 代	弥生時代中期
<p>説 明</p> <p>○瓜生堂遺跡の概要</p> <p>瓜生堂遺跡は、大阪府東大阪市若江西新町、瓜生堂町、西岩田町、岩田町に所在する、弥生時代から中世にかけての複合遺跡である。弥生時代前期に集落の形成がはじまり、中期の集落域と墓域をもつ弥生時代の河内地域を代表する大規模集落遺跡である（図1）。弥生時代の瓜生堂遺跡は旧河内湖に流れ込む旧大和川などの河川によって形成された三角州性低地上に位置し、離水が進んだ自然堤防上に集落や墓域、周辺の低地部分には水田域が広がっていた。</p> <p>瓜生堂遺跡は、昭和9年（1934）に遺跡内を流れる楠根川の改修の際に多量の弥生土器が発見されていたが、昭和40年（1965）に工業用水管理設の現場で弥生土器と青銅製利器^{（註1）}の先端が出土したことで注目を浴びることとなる。その翌年、昭和41年（1971）から始まる瓜生堂遺跡調査会による第二寝屋川改修工事に伴う調査で弥生時代中期の墓域が広がることが確認された。その後多数の調査が行われてきたが、1970年代後半の（財）大阪文化財センターによる近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う調査や2000年代前半の（財）大阪府文化財センターによる近鉄奈良線立体交差化に伴う大規模調査等で弥生時代中期の方形周溝墓群や集落跡が確認されている^{（註2）}。</p> <p>本遺跡で発見された方形周溝墓群は、後の洪水等に伴う土砂の堆積により墳丘の立体的な構造が良好に保存され、その構造を解明するものとして学史上重要な成果として位置づけられる。遺存状態のよい木製品や青銅製品など多様な遺物が出土していることも本遺跡の特徴である。</p> <p>○銅戈の出土状況</p> <p>銅戈は先述した1979年に近畿自動車道建設に伴う調査で出土したものである。北から南に向けてA地区～H地区の計8区の調査区が設けられ、そのうちB地区から出土している（図1）。B地区では弥生時代中期遺構面I・IIの2面があり、I面とII面は出土した土器から弥生時代</p>	

中期後半に比定できるが、若干の時期差が認められ、遺構の様相も異なる。弥生時代中期遺構面 I では溝やピット等がみられ集落域として機能していたことが想定される。その上に部分的に灰緑色粘土等からなる遺物包含層、さらに黄白色砂層が部分的に堆積し遺構面 II を形成する。遺構面 II は調査区北側を北東—南西に流れている河川 1 と南に 6 基の方形周溝墓を検出しており (図 2)、集落域から墓域へと変化したことがうかがえる。銅戈はこの墓域北側の河川 1 内北東側、流心にあたる部分の埋土上面より出土したものである。河川内の埋土は灰白色砂、白色砂が主であり、最上部に遺構面 II に伴う包含層が堆積し、この銅戈は包含層と下層の白色砂の境より出土しており (図 3、写真 1)、埋納坑を伴わず廃棄されたものである可能性が高い。

○銅戈の概要

本資料は完形で出土しており、全長 24.2 cm、刃部幅 3.1 cm、^{まち} 関部幅 7.7 cm、樋長 12.0 cm、樋幅 0.4 cm、^{なかご} 内長 0.6 cm、内幅 0.7 cm、刃部厚 0.12 cm、関部厚 0.12 cm、^{しのぎ} 鎬部厚 0.07 cm、内部厚 0.04 cm となり (註³)、全体で薄く、扁平な形態となっており、長軸方向に緩やかに反っている (図 4、写真 2)。

樋の先端が分かれ、樋内部に複合鋸歯文が鋳出されている特徴をもち、「大阪湾型銅戈」と呼ばれる大阪湾沿岸地域を中心に近畿地方以東に分布する型式の銅戈である (註⁴)。このほかに内^がが横長で、関と身の斜行が著しいといった特徴をもつ。

複合鋸歯文は山形を 2 条 1 対の平行な凸線で鋳出している。樋は刃部よりやや薄くなっているのみで、樋としての機能は果たさないものと考えられる。鎬は樋部分では明瞭であるが、先端部分では突線でも鋳出されていない。関部の断面は菱形を呈するものの簡略化された形となっている。また内は非常に小さく退化している。刃部は全く磨きだされず、縁を切り取りしたままで面を有している。

鋳造方法についてみると、鋳型は湯口が^{きつさき} 鋒部にあつたと考えられる。所々に^す 鬆 (註⁵) が認められるのも本資料の特徴で、やや性質の異なった金属で鋳かけされていることがわかる (写真 3)。2007 年に実施された蛍光 X 線分析では、銅 75%、錫 15~20%、鉛約 5%と銅の濃度が高く、湯流れが悪くなることから、^す 鬆や鋳かけ部分の多く生じていることが推定されている (註⁶)。刃部周辺には鋳型の痕跡が残っており、鋒部では鋳バリを鑿で切断した痕跡がある (写真 4・5)。穿の部分には直径 0.2 cm の孔があるが、これは鋳かけ後に穿孔されている。また樋の先端部にはかすかに指紋を残していることから (写真 6)、土製の鋳型であった可能性が高いと考えられる (註⁷)。

○評価

本資料は大阪府下で唯一完形で出土した銅戈であるとともに、発掘調査によって時期を限定できる土器群と共に出土しており、その資料的価値は高いものである。

先述したように「大阪湾型銅戈」は弥生時代中期後半に近畿地方以東に広がりを見せる。大阪湾周辺が分布の中心となるが、東は長野県周辺まで分布している (註⁸) (表 1)。その成立については諸説あるが、特徴的な型式と分布範囲は、九州において展開していた銅戈を含む武器

形青銅器の祭祀が弥生時代中期後半に近畿地方周辺で独自の形で受容され展開していく。「大阪湾型銅戈」は、古いものから新しいものへ、薄型化、扁平化、小型化する変遷が示されており、本資料は新しい様相を示すものとして位置づけられる。

祭祀の方法についてみると、九州では墓への副葬品として他の武器形青銅器と共に銅戈が出土するのが一般的であるのに対し、「大阪湾型銅戈」の古い様相を示す兵庫県神戸市桜ヶ丘出土銅戈のように銅鐸と共に埋納された事例があり（表1）、近畿地方以東で独自の展開をする。さらに新しい様相のものは明確な埋納遺構を伴わないものへと変化し、河川の埋土上面より完形の状態で出土した本資料や、同時期の資料とされる大阪府久宝寺遺跡出土例のように^(註10)破片となり小型利器として出土したものがこれらの段階を示す資料と言える。

また「大阪湾型銅戈」の鋳型は石製のものが滋賀県守山市服部遺跡、土製のものが大阪府茨木市東奈良遺跡で出土しており、近畿地方において生産されていたことが確実である。銅戈の型式からみて服部遺跡出土石製鋳型は大阪湾型の古い段階のもので、東奈良遺跡出土土製鋳型はそれよりも後出する。近畿地方では石製鋳型から土製鋳型による独自の生産方法へと変化したことが指摘されており^(註9)、本資料もこうした土製鋳型への転換を示すものとして位置づけられる。

本資料は良好な状態で出土し、その型式的な特徴や出土状況から「大阪湾型銅戈」が近畿地方以東を中心として展開した様相を物語るものであり、大阪府下のみならず近畿地方における武器形青銅器の祭祀のあり方を示す重要な資料と言える。

以上のとおり、本資料は大阪府下における弥生時代の青銅器祭祀の実態や特質およびその背景を考える上で高い価値を有するもので、大阪府指定文化財としてふさわしいものと評価できる。

[註]

(註1) 青銅器利器については戈あるいは剣の鋒とされるが(荻田1966、(財)大阪文化財センター1980)、吉田広の集成において銅戈とされている(吉田2001)。

(註2) (財)大阪文化財センター『瓜生堂』1980、(財)大阪府文化財センター『瓜生堂遺跡1』2004ほか

(註3) 銅戈各部位の説明。関は身と内の境の角張った部分、鏑は刃の研いだ面と隣り合う面との境界線、樋は脊と刃の血流しの溝、内は柄の長軸に直行する方向に穿った孔に差し込むための突出部、鋒は先端のどがったところ、穿は柄と身を固定するため柄に沿った部分に穿った複数の孔。

(註4) 「近畿型」という呼称も用いられるが(吉田2001)、ここでは「大阪湾型」という呼称で統一する。

(註5) 鋳型に溶けた金属を流し込んだ際、それが冷却・凝固するとき、空気などのガスが内部に閉じ込められて空間が生じたもの。

(註6) 松岡良憲・山口誠治・岩立美香「瓜生堂遺跡出土の大阪湾型銅戈並びに久宝寺遺跡出土の青銅製品」『平成19年春季特別展稲作とともに伝わった武器』大阪府立弥生文化博物館図録35 大阪府立弥生文化博物

館 2007

(註7) 前掲註6 松岡ほか2007、柳田康雄「第6章 銅戈」『日本・朝鮮半島の青銅武器研究』雄山閣 2014

(註8) 前掲註7 柳田2014、前掲註4 吉田広 2001 に加え、近年兵庫県淡路島や鳥取県で出土している。

(註9) 前掲註7 柳田2014

(註10) (財) 大阪文化財センター『久宝寺南(その1)』 1987

[参考文献]

荻田昭次「大阪府河内市瓜生堂弥生遺跡に出土した銅利器片」『古代学研究』第42・43 合併号
1966

三木文雄「大阪湾型銅戈について」『MUSEUM』223 1969

(財) 大阪文化財センター『瓜生堂』 1980

岩永省三「弥生時代青銅器型式分類編年再考」『九州考古学』第55号 九州考古学会 1980

(財) 大阪文化財センター『久宝寺南(その1)』 1987

難波洋三「戈型祭器」『弥生文化の研究』第6巻 雄山閣出版 1986

村上富喜子「第IV章遺物 第5節 金属器・鎔范 第1項 銅戈」『河内平野遺跡群の動態
III』大阪府教育委員会・(財) 大阪府文化財調査研究センター 1996

三好孝一「大阪湾型銅戈考」『古文化論叢—伊達先生古稀記念論集—』伊達先生古稀記念論集刊
行会 1997

吉田広『弥生時代の武器形青銅器』考古学資料集21 国立歴史民俗博物館 2001

(財) 大阪府文化財センター『瓜生堂遺跡1』(財) 大阪府文化財センター調査報告書第106集
2004

松岡良憲・山口誠治・岩立美香「瓜生堂遺跡出土の大阪湾型銅戈並びに久宝寺遺跡出土の青銅
製品」『平成19年春季特別展稲作とともに伝わった武器』大阪府立弥生文化博物館図録 35
大阪府立弥生文化博物館 2007

(公財) 大阪府文化財センター『瓜生堂遺跡4・岩田遺跡2・花屋敷遺跡3』2012

吉田広「近畿における銅戈の展開」『菟原 II—森岡秀人さん還暦記念論文集—』菟原刊行会編
2012

柳田康雄「第6章 銅戈」『日本・朝鮮半島の青銅武器研究』雄山閣 2014



図1 瓜生堂遺跡周辺の既往の調査と弥生時代中期後半の様相 ((財) 大阪府文化財センター2012)

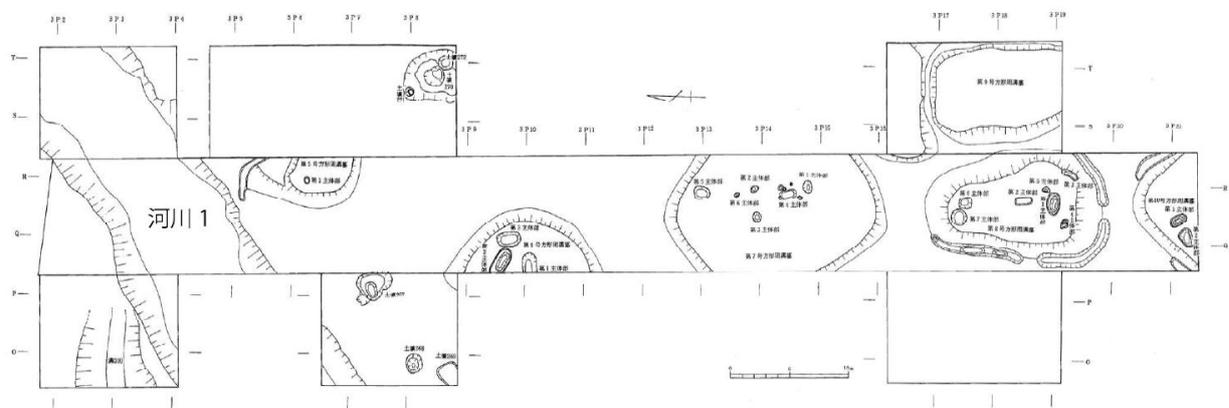


図2 瓜生堂遺跡弥生時代中期遺構面II遺構平面図 ((財) 大阪府文化財センター1980)

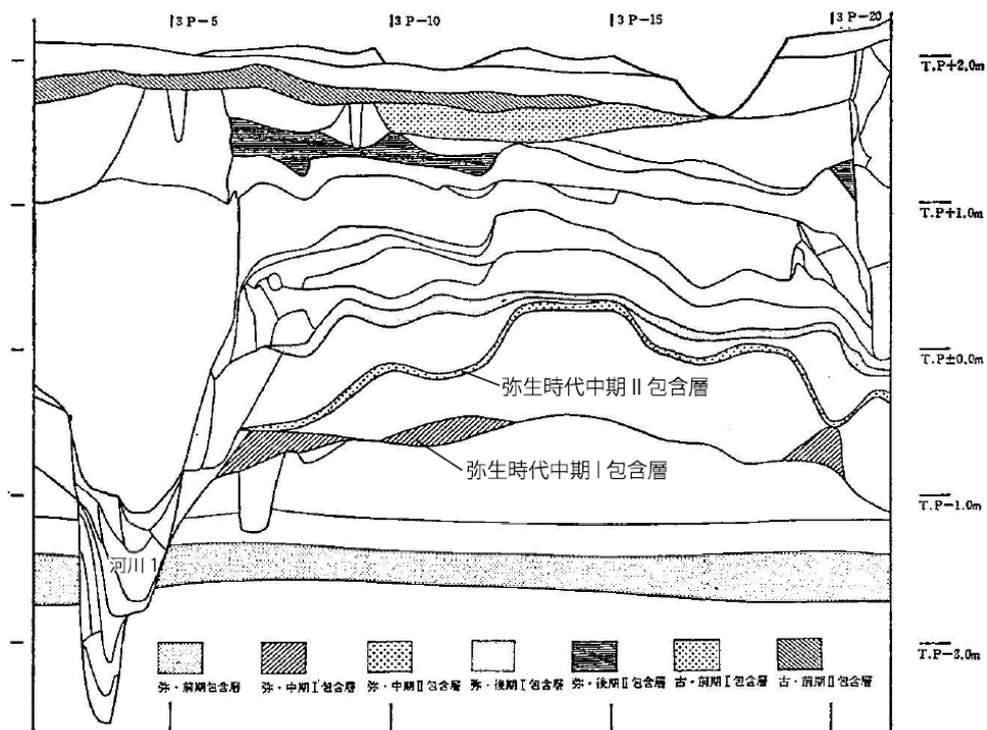


図3 瓜生堂遺跡 B 地区土層断面図 ((財) 大阪府文化財センター1980 に加筆)

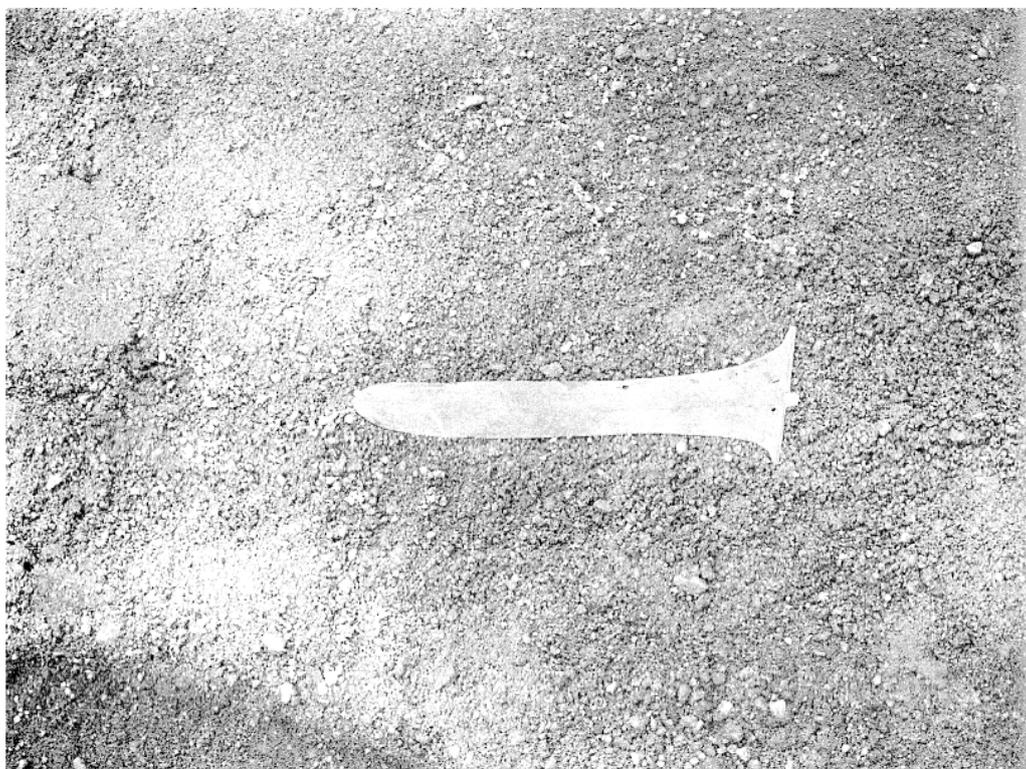


写真1 瓜生堂遺跡銅戈出土状況

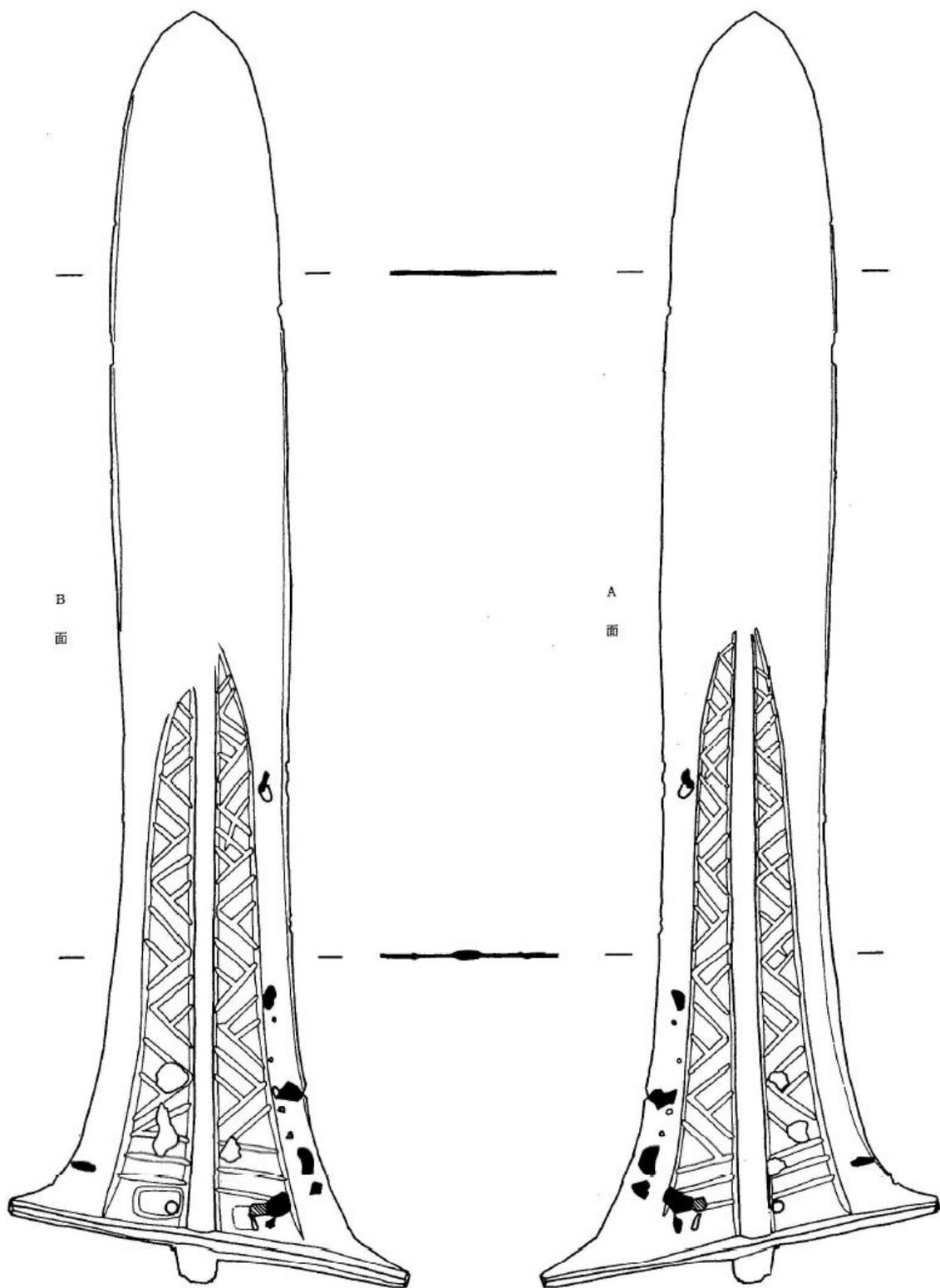


图4 瓜生堂遺跡出土銅戈実測図



写真 2 瓜生堂遺跡出土銅戈 (大阪府弥生文化博物館 2007)

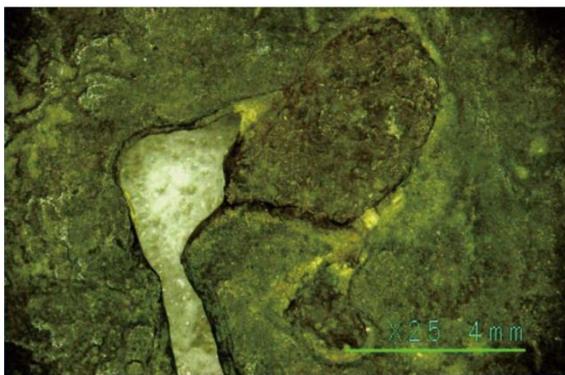


写真3 鑄かけ

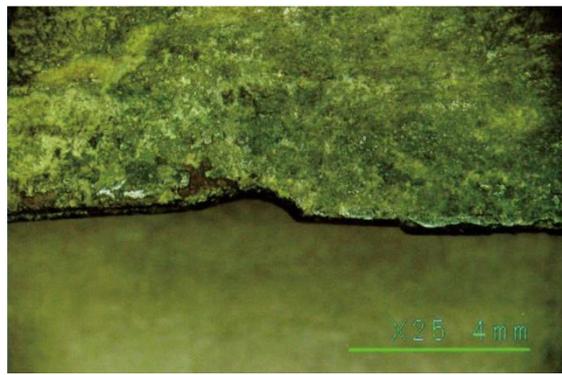


写真4 鑄張り部分



写真5 鑿刃部痕跡

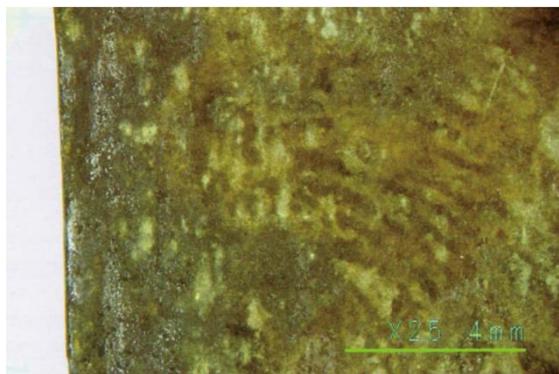


写真6 指紋状部分

表1 大阪湾型銅戈及び鑄型出土地一覽

番号	器種	出土地	遺跡名	点数	指定状況	備考
1	銅戈	和歌山県箕島町山地	—	5		埋納、付近で銅鐸出土
2	銅戈	長野県中野市	柳沢遺跡	7	国重要文化財	埋納土坑より出土、九州型銅戈、銅鐸共伴
3	銅戈	高槻市大塚町淀川河川敷	—	1		採集
4	銅戈	伝 長野県北安曇郡小谷村 (大町市海ノ口上諏訪神社)	—	1	大町市指定文化財	
5	銅戈	神戸市灘区桜ヶ丘町	—	7	国宝	埋納、銅鐸共伴
6	銅戈	鳥取県鳥取市	青谷上寺地遺跡	1		破片で出土
7	銅戈	大阪府東大阪市	瓜生堂遺跡 (1965年)	1		採集
8	銅戈	大阪府東大阪市	瓜生堂遺跡 (1978~79年)	1		河川上面より完形で出土
9	銅戈	神戸市灘区本山町北畑	(保久良神社境内)	1		神社境内出土
10	銅戈	大阪府東大阪市	久宝寺遺跡	1		土坑より破片で出土
11	銅戈	兵庫県南あわじ市	幡多遺跡	3?	南あわじ市指定文化財	土坑より多数の破片(3個体分)で出土
12	銅戈鑄型	滋賀県守山市	服部遺跡	—		—
13	銅戈鑄型	大阪府茨木市	東奈良遺跡	—	国重要文化財	—

※太字は大阪府内出土